

画像1 「チヒサイイキモノ」表紙  
多田北鳥画 (昭和12年)

もがある(昭和五年七月「虫の巻」、昭和八年十月「小サイイ蟲」、昭和十年九月「ムシノセイクワツ」)。それらと比べ、この昭和十二年の号の特徴として目につくのは、擬人化された「虫」の登場が多いことだ。ブック全体で十七の主題が扱われる(表紙を含む)中、六件が擬人的に描かれている。例えばクモが鉢巻きをしていたり(画像2)、ノミが競技場で棒高跳びをしていたり(画像3)

浜口順子(はまくちじゅんこ)  
お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。

子ども学探訪

編輯顧問

倉橋惣三

と

キンダーブック

10

擬人化される虫たち

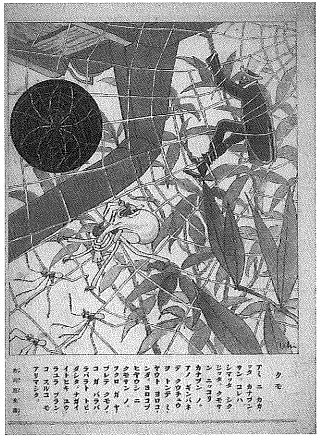
今回は、昭和十二年十一月刊行の「チヒサイイキモノ(小さい生きもの)」特集号を中心に考えてみたい(画像1は表紙)。そこに取り上げられているのは、クモ、蚊、ミドリウソカ、ハエ、アリ、ブヨ、ミノムシ、ノミ、コクゾウムシ、蚕、シミ、ミズスマシ、ホタルなど、ほとんど「虫」たち(メダカと子ガメが例外)である。

イキモノを真つすぐに見ているか

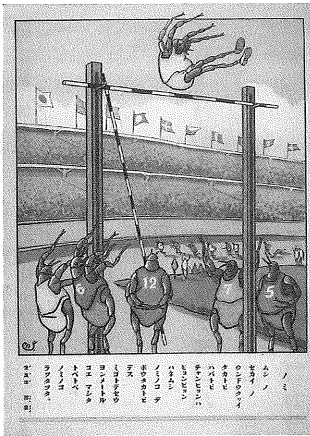
—第十輯第八編「小さい生きもの」を中心に—

浜口順子

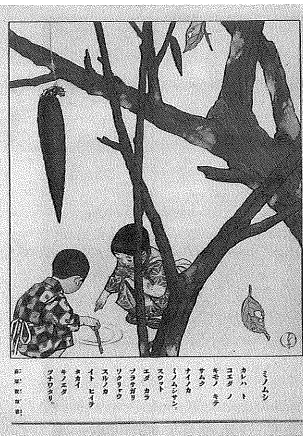
(大学教員)



▲画像2 「クモ」市川越夫画



▲画像3 「ノミ」世良田勝画



▲画像4 「ミノムシ」藤澤龍雄画

するのだ。また、全体が七五調を基調にしたリズムミカルな文章になっているのも、本号の特色だ。「ミノムシ」のページは次の通り。

「カレハ ト コエダ ノ キモノ キテ サムク ナイノカ

ミノムシサン。スウツト エダ カラ ブラサガリ ソクリヨウスルノ カイト ヒイテ タカイ キノエダ ツナワタリ。」

その絵（画像4）は擬人化こそされていないが、ミノムシのぶら下がる木が近影となり、二人の子どもがしゃがむ姿を透かし見る構図には、広重の浮世絵のような奇抜さと面白さがあり、芸術性を重視するキンダーブックの編集方針の一端が感じられる。

### 画家・柿原輝行の出征を伝える

キンダーブックには、昭和七年の四月以来、『ツバメノオウチ』という小冊子（あるいはリーフレット）が附録で付くようになってきた。この号の『ツバメノオウチ』に、岸辺福雄（昭和二年創刊以来、倉橋惣三と共にキンダーブックの編輯顧問）が「ホタル」のページのために次の文章を寄せている。「ホタル」のページをしてみよう。水辺のホタルは提灯をぶら提げている（画像5）。岸辺は、この絵を描いた柿原輝行が出征したというニュースを伝え、そこに彼を見送った軍歌の歌詞も付されていることに、時代を感じる。



▲画像5 「ホタル」 柿原輝行 画

「ホタル」

キシベ フクヲ (『ツバメノオウチ』所収)

コノ ホタルノエヲ オカキニ ナリマシタ、カキハラテルユキ  
 センセイハ、コノエヲ カイテオイテ スグニ ヘイタイサンニ  
 デラレタノデアリマス。

テンニカハリテ フギヲウツ チユウユウムサウノ ワガヘイハ  
 カンコノコエニ オクラレテ イマゾ イデタツ ツボノクニ  
 カタズバ イキテ カハラジト チカフ ココロノ イサマシサ  
 ト、ウタツテ オミオクリヲ イタシマシタノデス。

(中略)

ホタルノ タマゴハ タマゴイロデス。一ピキノ メスガ ミヅノ アル シメツタトコ  
 ロノ クサノ ネニ 三百モ 四百モ ウミマス。ソノ タマゴノ トキカラ スコシヒ  
 カリマス。 タマゴカラ ムシニ ナリマシタトキデモ ヒカリマス。ソレカラ サナギニ  
 ナツテ フユ ネムルノデス。ソノサナギノ トキモ ヒカリマス。アレハ オトモダチ  
 ヲ タヅネルノデス。

ホ ホ ホタルコイ コツチノ ミヅハ アマイゾ ソチラノ ミヅハ ニガイゾ  
 ホ ホ ホタルコイ ト イフテ ヤリマス ト コチラニ クルノモ アリマス。  
 カハイイデスナ ハイ ハイ



▲画像6 「ハウホンツクリ」 柿原輝行画 (昭和5年)

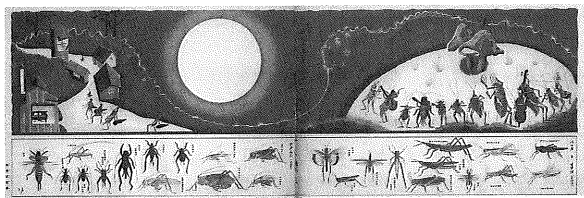
### 何のための「観察」なのか

この号の七年前に作られた「虫の巻」に、同じ柿原が挿絵を描いた「ハウホンツクリ(標本作り)」というページがある(画像6)。上半分には、「野原で捕ってきた珍しい虫」を「薬につけ、針で留めて」標本作っている図、下半分は、昆虫箱、捕虫網などの「虫を捕る道具」の説明画だ。「観察絵本」のキンダーブックとしては、このような科学的な虫の観察方法を示すページこそ、面目躍如たるものであるはずだ(つた)。同じ画家が七年後には、提灯を提げたホタルを描くのである。画家は、各号について編集会議から出される注文に、ただ忠実に、絵を提供していたのであろう。

昭和五年、八年、十二年の号に共通して見られる、地下に巣を作る虫の生活の描かれ方を比較してみよう。昭和五年版(画像7)では、イチゴの生える下に広がるアリの巣穴の中の様子が写實的に描かれている。昭和八年版(画像8)は、「ムシノエンソウクワイ(虫の演奏会)」というメルヘン的な題の下、マツムシやキリギリスなど実に多様な昆虫が、地下の巣穴に集まり、チェロやギターを演奏する姿が描かれる。非現実的な内容にもかかわらず、虫の種類が見分けられるよう詳細に描き分けられ、正式な名称も付記されている。月明かりをアクセントに、子どもの観察眼を刺激する面白さが引き立てられ、



▲画像7 「アリノオクニ」中西義男画 (昭和5年)



▲画像8 「ムシノエンソウクワイ」 武井武雄画（昭和8年）

叙情性と写実性のバランスは絶妙だ。一方で、昭和十二年版の「アリト ソノオウチ」（画像9）は、アリの巣が地下なのかそうでないのかが一見して明確でないばかりか、洋服を着せられたアリたちの体の構造や特徴をつかめるようにもなっていない。七五調の文体による働きアリの種類の説明は、どこかチグハグな印象がぬぐえない。

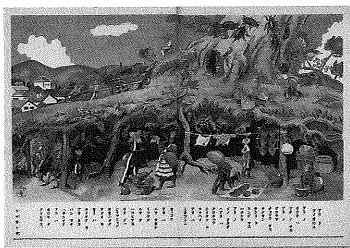
### 二人の編輯顧問の「観察」への姿勢の違い

昭和十年前後以降のキンダーブックを見てみると、観察絵本としての方向性における揺らぎと、各号の完成度のムラのようなものを感じてしまう。昭和十七年三月に、誌名が『ミクニノコドモ』に変更させられる社会状況へと刻々と近づいている。その中で、子どもが「観察」する意味をことさらに問う、倉橋惣三の文章がある。

#### 小さい生きもの

倉橋惣三（『ツバメノオウチ』所収）

「小さい生きもの」……。二つの感じが湧き出る。「生きている小さいもの。」こう思うとただもう可愛らしくなる。小さいという方が主になって感じられるのである。もう一つの感じは「小さいが生きているもの。」この方では生きているという方が主になって感じられて、こんなに小さいのに、こんなに生きているというところから、可愛らしいというよりも、えらいという心



▲画像9 「アリトソノオウチ」  
今村寅士画（昭和12年）

もち、驚きの心もち、いささか強めすぎた言い方をすれば、畏敬ともいいたい心もちが起ころ。一匹の蠅がはっている。ああ可愛いと思うのは前の方の心もちで、なんとまあと感ぜられて来るのは、後の方の心もちである。

ところで、後の方の感じ方。すなわち小さいものにその生命の偉大さを感じる感じ方は、詩人とか、哲学者とかいう人々の場合に著しいことで、少なくともおとなの心深い感じ方である。幼い子どもには、そうは感じられていないのが普通だろう。小さいという見た目の感じが主になって、可愛いという方が、先に立つものである。そこで、心やすい親しみ、軽い、どこまでも和やかな侮り、その意味での、どこことないおどけ味、そんな心もちが伴うのである。それでよろしい。幼い子どもが、蟻を見て、その生命の偉大さに驚くなんていうことがあつたら、それこそ、その小さい子どもがあまりにも可愛らしくないことになる。

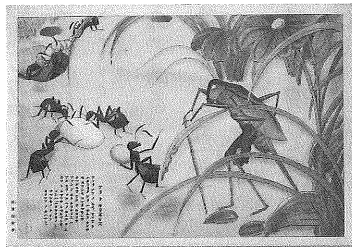
しかし、だが、幼い子どもでも、小さい生きものに対して、単に小さい物に対する感じとは違つた何かを感じられるであろうかと察せられる。少なくとも小さい生きものに対する観察の指導の一つの方向の中には、子ども等のその感じに触れてゆくところがあつていいことである。

但し、実に但し。だからといって、幼い子どもをあまり詩人にしたり哲学者にしたりするのはよくあるまい。それよりもむしろ科学者にした方がよからう。少なくともこの観察絵本では、そこらがいいところであろう。科学者にするとは、その小さきものが、如何に生きていくかを、とにかくも、よく見させることである。生きる力、生命、なんていう奥深いことでなく、生きて動くその實際を、忠実に見させることである。小さいながら、足のあることを、翅のあるこ

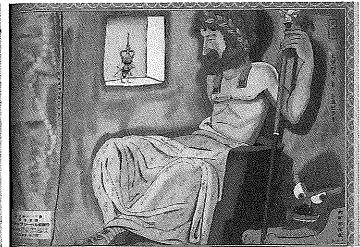
とを、目や口や角の仕かけのうまく出来ていることを、生き方の巧みな工夫をよく知っており、うまくやってゆくことを、……そうして、その知識から起こる驚嘆の感じを、少しばかり感じさせることである。

(中略)——大体的に、おおざっぱにぼんやりと、ただ感情的に「まあ可愛いこと」で片づけてしまいがちな先生やお母さんより、どんなにか科学的なかもしれないくらいである。ましては、そんな小さいものと、言い捨てて見捨ててしまおうとする大学者よりも。——この大学者というのは、大きい物だけに注意を向ける人ということである。

倉橋は、子どもが「小さい生きもの」に目を見張り、驚き、しっかりと見つめることを重視する。そのための観察絵本であると言い切る。しかし、実際のキンダーブックはどうなってきたか。キンダーブックは創刊以来「理知と芸術の交響楽」をモットーの一つに掲げ、各巻に文化や芸術の香りのするページがある。昭和五年版ではギリシヤ神話の「ミツバチとジュピター」(画像10)が、昭和八年版にはイソップの「アリとキリギリス」(画像11)が、それぞれ取り上げられ、そのフィクション性は、写実的科学的に描かれたページとは画然と分かれている。一方、擬人化や七五調の文章にあふれる昭和十二年の「小さい生きもの」特集では、おとぎ話のページはない。イキモノの命を真つすぐに観察させるより、あいまいな面白味を優先させたようにも見えるのは、この時代の背景にいや増す軍靴の音を感じるからだろうか。



▲画像11 「アリとキリギリス」  
藤澤龍雄画(昭和8年)



▲画像10 「ミツバチとジュピター」  
武井武雄画(昭和5年)